戈・戟・矛・玉具劍の名は正しい。唯圖版一一、4の朝鮮樂浪古墳出土の銅矛の說明に「矛刄の莖部に接するところに一種の山形文の裝飾が施され云云」(一一頁)とあるが、あれは矛の鞘袋にあつた口金具らしい。詳しくは朝鮮總督府の大正十一年度報告第二册にある。また甲冑の方は古い資料がなくて困難であるが六朝の武人俑を資料とされ乍ら、ラウファー氏の甲冑の研究 "Chinese Clay Figures" 第十五圖・第十六圖にある札甲をつけた漢の武俑を引用されなかつたのはどうかと思ふ。併しこの二つはこれだけの特殊な問題である。

要するに何事でも始めから完璧を期することは無理である。何等經つたものゝない支那考古學界に對しては重要なる礎石である。礎石は踏み臺にされる爲めに必要なのであり、尊いのである。善かれ惡しかれ將來の兵器論はこの礎石から出發するだらう。私が非禮をも顧みず勝手なことを云つたのも本書を出發點としてのことである。時代の經つと共に本書の眞の價値は自ら決せられるであらう。(東方文化學院東京研究所　昭和七年刊、菊二倍大、三七頁及四四頁圖版五二)〔水野〕

◉魏晉南北朝通史

待望の書、東北帝國大學教授岡崎文夫氏著魏晉南北朝通史出づ。全書を內外二篇に分ち、內編は東漢宦者の禍より筆を起し、北周、南朝陳の滅亡に至る治亂興亡の跡を叙し、外編は魏晉南北朝の文明を概觀してゐる。

從來東洋史に關する著述は斷片的な論文を集成したものが多く、一時代を通論したものは僅かに稻葉君山博士の清朝全史、矢野仁一博士の近代支那史等二三あるに止まる。近頃國史のやり方を模して講座風に數人で各時代を分擔する叢書が出たが、形式上の束縛があるので、書く人も十分に筆が揮へぬであらうが、讀者の方でも不滿である。最も得意とする一時代の通史を、何等の掣肘なく、心のゆくまゝに論述したのは、古代の部に於ては、此著を以て最初の試みとする。

內編は主として、著者の言を借れば權力の移動する所を究む。元來この時代は所謂暗黑時代であり、五胡十六國の興亡の大勢に就て、一通りの概念を得るさへ容易でない。著者はよく史料を咀嚼消化して、自己のものとして說明してゐる。決してありふれた通鑑輯覽の抄譯でない。恐らくはあまり參考書に賴ることなく胸中に蓄へた知識を吐き出して一氣呵成に出來たのではないかと思はれる。從つて複雜な事象を尤も印象强く叙述してゐる特長があるが、又其爲に折々人名などの混同が生じてゐる。一九七頁の謝尙は謝玄なる可く、次頁の苻登は苻丕であらう。尤も之は前後を精讀すれば自然に分るが枋頭の戰を記してこの時の花形役者慕容垂の名を逸してゐる等は如何かと思ふ。蓋し博學より生じたる粗漏であらう。

外編は、之も著者の言を借れば、專ら人文の化成する迹を記す。著者の云ふ人文とか、文明とかいふ意味は恐らく人間其物、社會其物のありのまゝの姿を云ふのであらう。近頃文化といふ

言葉が流行し、書や畫や陶器や玩具や音樂やを羅列するのが文化史のやうに考へらるゝ傾向があるが、此著は一切斯かる人間の持つ道具を振り棄てゝ了つてゐる。之も一つの見方である。唯もう少しこの時代に特有な社會事象を詳細に說明して欲しい。例へば部曲なるものは、この時代の貴族制度を領解するにも必要な要素であれば、更に立入つて其性質が究められてよいであらう。

卷頭に正誤表があるが其他にも二三目につく。由來弘文堂印刷所は支那學社から活字を寄贈されたりして、奇字異字を豐富に所有してゐるのはよいが、其爲に反つて誤植を多くするのは迷惑である。商を屢〻商に作り、匈奴の匈を匈に作れるは、貧弱な印刷所ならばせずに濟んだであらう。又弘文堂が活字に敏感で、新活字をいくらも鑄造するのはよいが、過ぎたるは猶及ばざるがごとし。時には全然ない字までも造る癖がある。本書百十頁、暴害の暴の字も、何もあんな六つヶしい活字にする必要はなかつたであらう。二五〇頁、皇太子が父帝を誅殺といふが如き語句も妥當でない。白璧の微瑕と雖も再版に際して訂正して欲しい。

東洋史學が更に進步すべくして進步せざるは良參考書を缺くが爲である。一部二十四史、何れの所より讀み始めんか、之常に初學者の嘆である。幸ひにして魏晉南北朝は、本書によりて一條の通路を開かれた。此種の企が更に專門家の手によつて他の時代にも及ぼされんことを希望して止まぬ。（宮崎）

第十八卷　第一號　一七〇

（京都弘文堂發行、定價金五圓）

Foakes Jackson: Josephus and the Jews

猶太史家 Flavius Josephus の評傳及び彼の著作を通じて見た猶太史の概說で、The Religion and History of the Jews as explained by Flavius Josephus なる補題を附する。著者は紐育の The Union Theological Seminary の基督教神學の教授で、聖書神學或は舊新約時代史に關する著述少なからず、本書も、舊約時代史と新約時代史との間に横はる隙罅を繫ぐ殆んど唯一の現存文獻である Josephus の著書によつて、主として基督教の前表としての猶太教と猶太民族の歷史とを見んとするのである。

全卷を分つて五篇十六章とし、別に Appendix 五項がある。第一篇は Life and Faith of F. J. で、Josephus の自叙傳を通じて、彼の生涯の中最も多くの興味を持たれる紀元六六年の叛亂に際しての彼の態度を詳述した第一章と、彼が Apion の猶太教攻擊に答へた護教的著述 Contra Apionem によつて彼の信仰を檢討した第二章を含む。第二篇 The Religion of the Jews. は、The Temple, The Law, The Hope of Israel in Josephus. の三章より成り、如何に猶太人の信仰が形式主義的な神殿生活から離脫して、律法主義となり、其律法の精神が古きものより次第に新しきに置換へられたかを述べて、基督教發生の氣運にまで言及してゐる。第三篇 Independence of the Jews. はハスモ